通俗排悶録

吉田屋

七

へ13
3143
7

3143
7

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

春

吉田屋

宋子之禮既畢踏青之樓云梅
村橫窗驚聲起人代侍也無消
遣之具則老或沉於游蕩行或
失於淫僻是以科宮之家子術巧
小說之著日讒新然雪洛怪誕者使
人心好淫艷者使人淫亦樹

國翁所譚孫侯排悶錄十二卷去春
刊其半以世今漫及氏餘編矣要
恨浪翁之閑淡以之爲勸懲縛
馬試弓之祭祀可以爲標的五經
掄材以脫執之可以爲規範閑咎倦
繡之須視之可以爲砥礪非夫深文

好要妄言亂教以類併前孤淵悉氏
本末別猶滄海數珠供在掌中豈
城而劍之佩腰間不怪未況於第
六第卷我先考同齋府君當戕譯也
不可以再序故顛末行云又既矣
臘月立春之日俊齋大野顧撰

奇説排門録後集総目次

巻七上

明斷之部
舟人呼商妻
詩讞
臙脂

吉田屋

奇説排門録巻之七上

明斷之部

舟人呼商妻

一商賈。旅商ひよ行とく。装載しく珠奕ゑ。一人舟ゑ来やく。僕の来るを待居るゑ。久く待共僕至らぞ。舟人輜貨のヨヌを見且一身ゆく僕も未至らぞ。殊ゑ地ハ僻寂ゐして外ゑ人も無やけ見バ忽悪念を發し。今是を圖る良いと易し。と多ひ急ゑ舟を艘出して其人を遂ゑ水中ゑ擠しゝ、殺し。其輜貨を携へて帰やゐ。扨知らぞ顔つゝく。商家ゑ詣て遽く門を敲く向ひるゑ娘子何故官人ハ。船ゑ下やをゐざるやと呼ゝけ見バ商妻驚く人をして。所々尋求させけ見ども所在知らぞ。其僕ゑ向ゑ僕者く。

六樹園翁　譯

先程舟に到て尋つれども。主人及えぬるぞ。いざ帰りて来たりと云夫こゝ彼方此地尋訪けれども行方知れざる故。地里に斯と告報ければ地里是を知縣に訴ふ。縣令是を怪て舟人及都比を召出して。訊して反覆すれど卒に其状なし。其後縣令数人の訊を歴れども遂に決まるの能はざる。斯て賢能の知縣至て。此條を結せんとて。先商妻を召て人を屏けて。其妻に問て曰。当時舟人来て問し時の情状言語如何なりしと。妻曰。夫出去て良久しく。船家来て門を叩ぬ。門未開ざるに遽しく呼て申す。娘子何故宿人船に下らざると云ひて。外に何共云候まじと答ふ。知縣乃婦を退しめ。舟人を召て問ふに答ふる所。妻の云ふ所に符合せず。知縣笑て曰。商を殺せる者は汝こそ。已に自其罪を白せり。他の證を須

るに及ばずと云て。舟人譁て服せず。知縣怒て曰。汝来て門を叩く時。主人を呼ばずして妻を呼て主人を問ふ。是汝が中に主人家に在ざるを知る故なり。豈主人の家に在や否やを知らずして。尋ねて主人を呼ずして。其妻を呼者あらんや。汝速に情実を吐べし。と叱やけれども舟人驚て其罪に服しぬ。遂に其法を正して刑に行ひぬ。実に神明の政と謂つべし。

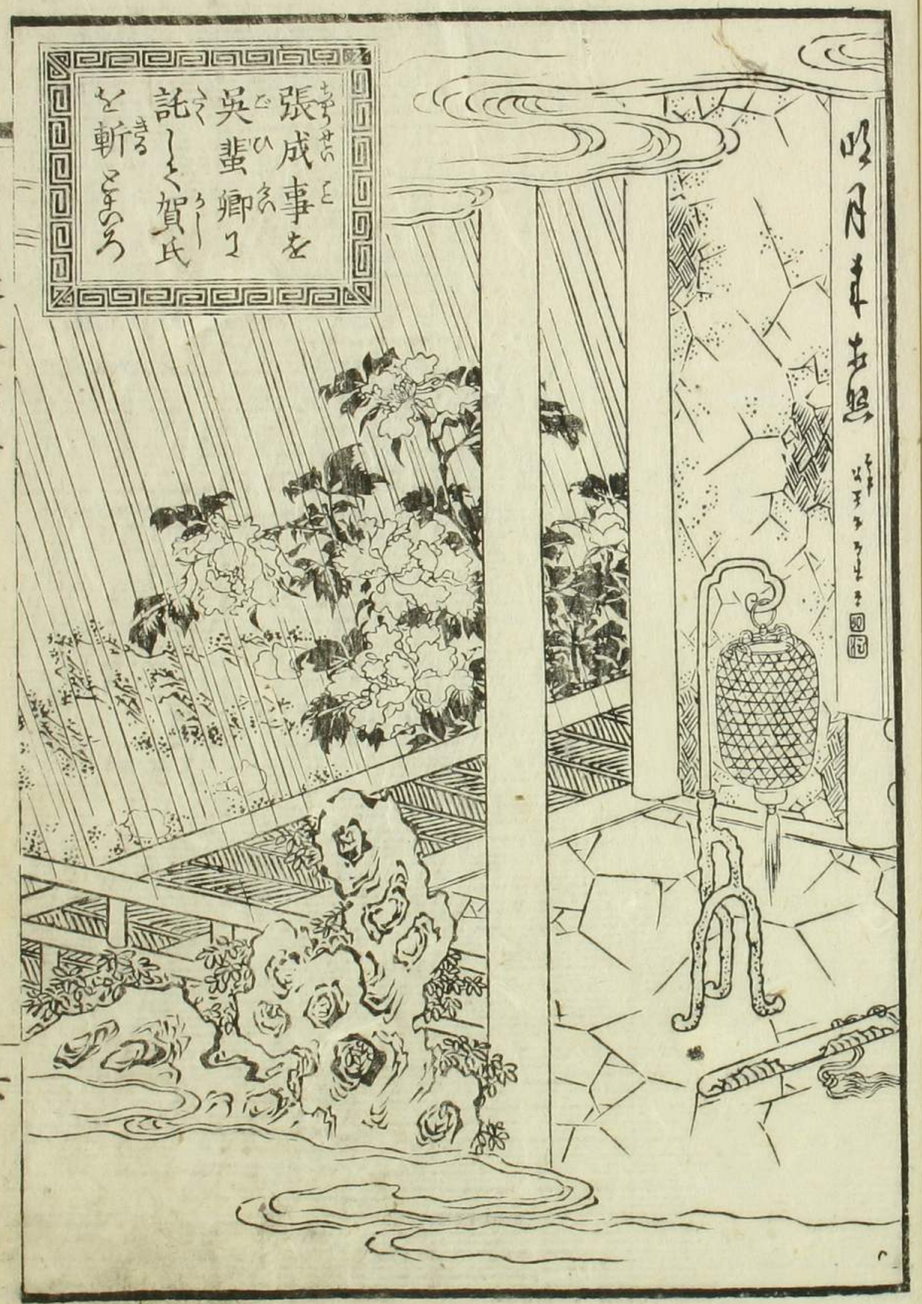
詩讃

青刈の居民に泥小山と云者。筆を販を業とす。此頃旅商に行て四箇月程に成ぬ。妻の賀氏獨空房を守て居るが。或微雨の降夜盗に殺されぬ。何者の所為なるか知者なし。泥の中に扇一握遺て有。其扇に詩を書たり。王晟と云者の書すて。呉蚩卿と云人に贈まる詩なり。王晟が何許の人

と云事を知らず。吳蜚卿ハ益都ゆく。素封の人ゆく范小山と同里なり。平日頗桃達の行ある故。郡縣ゆく召捕へゆくぎんこを云々まぶもちぐゆゆ。あまりゆく強く刑拷せゆまを遂ゆ誣ゆく罪ゆおちゆ。即十餘の官人の往復を歴けまぶぞを更ゆ異幾無ゆくまび吳蜚卿も今ハ自必死と覚悟しゆく田産を貨ゆく贈答ゆあてゆを。或日陰ゆ少の賂を盜者ゆ遺ゆく鴆を市しむ。其夜の夢ゆ神人来りゆく告玉ふハ。好死まるとゆ勿ゆ曩日ゆハ外邊凶ゆゆしゆ。今ハ目下内邊吉ゆゆんとの玉ふと見ゆく驚死覚ぬ再睡るゆ又同夢を見けまび。鴆を飲むる幾止めゆく待居ゆゆ。幾程もゆく周元亮先生と云人是道の紛守しゆく来ゆゆ囚共を慮しゆく吳蜚卿ゆ至ゆ。周元亮。先范小山ゆ向ゆく曰。吳蜚卿ゆ人を殺をとゆゆ何の憑據ある。時ゆ范小山彼扇を出しゆく元亮ゆ見せむ。元亮扇を熟視ゆく向ゆく曰王晟ゆハ何者ぞ皆答て知らずと曰しけまび。元亮此一件の書付を細閲一遍しゆく立所ゆ命しゆく吳蜚卿ゆ械を脱せゆ。監ゆを出しゆく倉ゆ移さる。是を見て范小山強ゆく爭ゆく。吳ハ蜚卿人を殺ゆ者ゆりと云けまバ。元亮怒ゆく曰。汝其罪をも正さず。一人を殺しゆまをまび便ゆとゆふや。實ゆ汝ゆ妻を殺せる讎人を沼て。甘心せんとハゆまぶ所やと叱ゆまをまび。衆人皆元亮ゆ吳蜚卿ゆ私もると疑ひゆく。敢ゆく復言ふ者ゆ。元亮即硃簽を標し。役を遣しゆく立所ゆ南郭地名ゆる某の肆の主人を拘へしむ。主人大ゆ懼まゆく其故を知らゆ。府ゆ至ゆまをまび。元亮問て云。汝ゆ肆の壁ゆ。東莞の李秀ゆ持あやと。是何時題せしや。答ゆく曰。舊歳提学の爰ゆ来ゆを時。二三の秀才有ゆく。酒を

呑く醉く留題せるなり。住居ハ何里なるゝ知やと侯ハぞと云々ゝ元亮遂
ゝ役を遣し。日照坐ゝ至て李秀を拘へしむ。秀即至やゝ元亮怒く
曰。汝既ゝ秀才と作る。奈何ぞ人を謀殺せるや。李秀錯愕く但
覚えなしと云けゝ。元亮扇を視よ。爾ゝ作る所なるく
爾ゝ書あり。何故詭く王晟ゝ託るや李秀審ゝ此扇を視く曰。詩を
真ゝ小生ゝ作る所なるも。字を寔ゝ小生ゝ書る所ゝ非ぞと云々ゝ元
亮云。汝ゝ書さる所ゝ非ぞとのゝ既ゝ汝ゝ詩を知る者の書さる所なり。
必ず汝ゝ朋友なるべし。汝必此書を知らん。誰ゝ書さる者ぞ。李秀答て曰
衍別の王佐ゝ筆跡ゝ似るもと云元亮即時ゝ殺を遣はく。王佐を廟拘
しむ。王佐至やけゝ元亮大ゝ訶る。李秀ゝ初く来りし時の如く云

る。王佐大ゝ懼れくその所以を知らず。因て又扇を出し見せけゝ王
佐曰。此益都の鐵商張成と云者。某を頼く書せしなり。王晟ハその
表兄なるといつと申けゝ。元亮大ゝ喜く。盗此ゝ在と云く乃張成
を執しむ。張成至やゝ々ゝ一訊しく忽吐実し。其罪ゝ伏しなり。初張成賀
氏ゝ顔色の美なるを窺見く。是を挑んと欲ゝ。不諧なんるゝ恐れ。
吳蜚卿ハ佻達の人なゝ吳ゝ託しなゝ人皆信とせんと念ひけゝ偽く吳ゝ
扇を為やゝ執行く諧ゝ乃自身の名を見し。不諧なゝ名を吳ゝ嫁く迯
去んと欲ゝ始なり賀氏を殺さんと迫ゝ吳氏
剛氣なる生なるく。獨居常ゝ刃を持く自衛る。張成斯ゝ知ぞ。垣越
喻く忍び入賀氏ゝ逼らんと去るを。賀氏既ゝ覚く張成ゝ衣を捉へ刀を


張成事を
吳蜚卿と
論じ賀氏
を斬る

摑く起上りて張成懼れて急に其刀を奪ひ取る。取られて取返さんとしたれども。婦人の力奪ひ返す事成らず。又身を脱るるも成ざる故大音ゆく蹕びて張成甚窘く已むる能はず。遂に賀氏を殺し扇を妻に進ぜしもの。吳蜚卿が三年の冤獄を周元亮一朝にして是を雪ぐ。明白に裁断あるべし。是に神明と稱せざる者なし。吳蜚卿此時先年の夢の告に内邊の吉凶周の字なる事を始て悟りぬ。然れども衆人の疑るいまだ解せず。邑紳間を窺て問ひ問元亮笑て曰。是甚知り易し。細に爰書を閲るに賀氏が殺されしは四月の上旬に殊に此夜。陰雨の天氣猶寒き時なるに扇をいとねぬ物に忙迫の時此不急物を携へて。累ひを増者あらんや是其害を人に嫁せんとするの察し知るべし。

郭向に南郭地ゆく。西に遇て避西せる時壁に題せし詩を見る。箕頭の持と口角相類せり。是故に何の憑據も無れども。妄度に先李秀を拘云やうなるもの。果して是に因て眞の盗を捕へ得たり。偶中にと云けれども。聞者歎服せり。

臙脂

東昌地名に牛鑒を業とする。下翁と云者あり。一人の女を生て小字を臙脂と名付。此女才慧の人に勝れしのみに非ず。容姿も又至て麗しく。下翁寶の如くに愛する事限りなし。隹壻を清門に求めんとのぞひける。世族の人の其寒賤を鄙め。締盟を成さず。是故に十五六歳に及べ共いまだ縁づかず。然るに對戸の龔姓なる人の妻王氏と云者。挑脱して

挑脫ハ挑逸ニ同シ善虐ハ善謔ニ同シ傍訓誤リ目テ一言ヲ傍ニ付ス

善虐なりるゞ。朝夕の談友なく有為。或日王氏来りて例の如く。話して帰りなるを女送て門際まで出る恰好。美少年一人白い衣着て来ゞ。門前を過行る。其手柔甚都うりければ女の心少し動いるゝや。ありあり少年を見ゆるければ。此少年も首を低れて趨行る。去る事既に遠けれども女も凝眺居たりければ。王氏其意を窺て戯れて。子の才貌を以て若人を配するゝ得ば實に十分なりんと云ければ女頬を暈紅にして一言も答へぬ。王氏又問て云。此郎を識て王ふや否や。女知らぬと答へ。又問ば王氏又曰。是南巷の鄂秋隼と云ふ秀才の父も孝廉に挙られし一人なり。妾向に南巷に住せし時。鄂家の郎なり。今素服衣を着て居る。妻死して其喪未闋らざる故也。子如し意有ば。言を傳へて氷人となるべしと云けれども。

女更に言いたまぬ。王氏も笑て帰りぬる。夫より女を晝夜鄂郎ばかり恋ひ戀ひて居たりるゝ。數日過けれども何の耗もなく。王氏も来ざりければ。扨て官家の郎君なるゝ。父の賤業を厭て。府拾せざるやと疑ひて。今も念の堪兼て。食も進まず夜も寢られざる。遂に疾とぞ成りる。王氏も来りて省視せる上。小語して成て曰。我夫員販して未帰らぬ。依て鄂家に言入る事なり。子の違和是故に非ずやと云けれども。女赤面して良久くして。歎て云ふ。妾既に懸念して直に難し。但鄂家我家の寒賤を嫌たまぬ。即媒を以て言すれば。妾が疾も即愈へし。若私約なれば斷しく不可と云けれども。王氏頷て帰りる。扨此王氏も幼時より。鄂主の宿分と云者と私通して。既に龔氏の婦と成て後も。宿分夫

の他出を偵て。輙舊好を尋ぬ。是夜も宿介來りけるに。王氏女の言しる所述て笑ひ戲れ。且鄂郎が致意を囑しる。宿介も此女の美なる事を久く知りけるに。寄語が階無き恨て居るが是話を聞て竊に其機に乘べしと喜び王氏と謀らんと思ひ。彼と謀べ必ず拓む事と思ひ。假に無心の詞をなす。女の家の閨闥のさま様。委く尋ね問て心に收め。次の夜垣を踰て下家に忍び入り。直ちに女の閨に到て。指ゆく窓を叩く。内より女の聲にて誰そと問。宿介小語して鄂生と答ふ。女云妾が君を思ひ奉る。百年の久き様願ふ所。何ぞ今宵一夕の歡を成さざ為ならんや。君真成に妾を愛せるに。速に媒人を借て礼を正しく迎へ。若私合せんに敢て命に從ひ奉らず

と云けるに。宿介苦に纖腕を握て。後の信にせんと求む。女是を拒て難く思ひ疾を力て扉を啓く。宿直に入て抱き着て歡を求んと云ける。女驚て撑拒んとすれども。病體力無くして地上に仆る。宿介是を見て急に曳起して。女曰。汝何くに來る惡少年ぞ。必鄂郎に非し。鄂郎は温順なるに。妾が病る由を知て王氏に必相憐恤ぬべし。何故に此の如く狂暴なる様為ならんや。若猶今の如くせば便嗚呼。左右に必人に知られん。若人に知られば品行虧損て。君も我も益なしと。宿介も假迹の敗露んを恐て。復強て言ずして但後會を請けるに。女の曰。親迎を待て王へと云ふ。宿介云。親迎を待て甚遠し。願くは近き日を期せんと請ふ。女糾纏て厭て。左右に病の癒る様待て王へと云ひ

けるに。宿今日然らば信物を出せと云。女固く辭して許さざりけるに。宿今
女の足を捉へて。繡履を解き持去る。女云。裏物已に君が手に入る。料る
に必反して王氏に。君若し負して妾を棄て。妾但死せんのみと云を。宿放
て出往ぬ。宿直に王氏の所に行て泊るが。履を忘れて。陰に衣袖を
揣て。あくまで因て衣を振て冥索けるに。王氏怪て何を尋ると云。宿
今已夏を過ぎて。定情を告て燈を取て。遍く門外までも索めけるに。竟
に見えず。髮の毛大と云者あり。巷中の生まれて游手無藉の者なり。嘗
て王氏に懸想して。挑けるに。王氏従はず。毛大怒て。宿今王氏に通ずる
なり。彼等二人が密事を見あらはして。王氏を脅して。従へんと。兼て巧を居
うして。此夜来て其門を推て。未扃ざりて。啓て。潛に入て。窃の下
に到る時。奥なる絮帛の如き物を踏つけて。拾ひ視るに。巾に包まる女履
なり。怪しと思ひ。なほ先懐に入れて。伏して聽ひて。宿今が自述を。悉く
喜ぶる限なり。抽身して。潛に出て。去て。斯て四五日を隔て。毛大夜
墻を越て。卞家に忍び入りぬ。門戸の結構を悉ぐりけるに。誤て卞翁
が舍に指れり。卞翁窃て窺ひ見るに。一人の男子来る。其音跡察るに
女の所へ忍び来る者と知りけるに。刀を操て直に出る。毛大大に驚き
反走て。卞翁追懸て。已に近く成りけるに。毛大急て逃る事成ざるに。刃
を反して。刀を奪ふ。此音に驚き媼も起上て。大に叫びけるに。毛大驚
て。覚悟して。遂に卞翁を殺して。逃去りぬ。女も此喧を聞て起出て
共に燭を乗て。翁の腦裂て言ふも成らず。微頃に息絶ぬ。媼。墻の

下ゆく繡履を沒く。能視るに臙脂が物に怪くて逼向けるに。女隱すこと能はざる。大ゐに哭して寔情を告ぐ。ゐるに先に對戶なる王氏が名を生せるゐ忍び才。只鄂郎自來れりと云ふ。乃浥滓ゐ訴へ出でて。浥滓殺を差して鄂生を拘へしむ。鄂生ハ其性謹慎にして。言詞温和なる者ゆゑ。今年十九歲ゐ成るが。常ゐ客ゐ對して。羞澁事童子の如し。此夜ハ夢ゐも知らざる。孰へらるとく大ゐ驚き魂を失ひ衙門ゐ來て。堂ゐ上りて詞を出すこと成らず。惟戰慄して居るに。邑宰錯て認て。斯恐るゐ卞翁を殺せるゐ疑ひなりと察して。横ゐ拷械を加へる。鄂生ハ痛楚ゐ堪ずして。遂ゐ誣の服ゐ股しぬ。其罪極まるとく郡ゐ解る。郡ゐも亦浥滓の如く其情を察せず。鄂生冤氣塡塞して。毎ゐ女と面質せんと欲ひ居けるが。女ゐ遇ふ時ゐ至て。忽然憤ゐ堪ずして。詬詈けるに。鄂生是ゐ氣を奪はれて。言語伸ること能はず。一言の荅も爲ざるに。罪ゐよりて鄂生ゐ歸して。死罪まで定りぬ。往來の覆訊ゐ。數官を經たれ共異議なし。其後濟南地の頂案ゐ委しくゐ。濟南の太守吳南岳と云ふ人。ひとつび鄂生が風采を見て。人を殺す類の者ゐ非ずと思ひ。甚疑へり。陰ゐ人を使ちて。私ゐ鄂生ゐ問ハしむるゐ。鄂生冤情を以て荅ゐ。南岳已に鄂生が冤を知りぬ。先臙脂ゐ問て曰。汝訂約の後外ゐ知者有や否や。女荅て曰。知る者無し。又曰。鄂生垣を踰て入りし時。別に人の知るゐ有や否や。亦荅て曰。知る者嘗て無し。乃鄂生を喚上して。吳公問ふに。鄂生曰。曾て其門を過し時。舊鄰の婦の王氏と。一の少女と門に在りて。某趙過侯へ共並に

一言も交ざると云ふ。吳公女を叱り曰。汝適別に他人無しと云ふ。何故に鄰婦を言ざると云へり。刑を用んとす。女懼れて曰。其時王氏側に在と雖。彼寔に關渉る事なし。吳公命じて王氏を拘へしむ。王氏至れば固く禁じて女と通せしなど。吳公王氏に問て曰。下翁を殺せるは誰人ぞ。王氏對て知候なきと云ふ。吳公詰て曰。臓脂供言に下翁を殺せる者は汝悉に知れるなりと云へり。汝胡ぞ隱匿るや。王氏大に呼て曰。寃哉。淫婢。汝自男子を欲す。其時我媒合せんと云しに。實に戲れなり。彼自奸夫を引て院に入る。我何ぞ是を知らん。吳公細に詰王ひければ。王氏始鄢生が門前を過りし時相戲れし詞。前後見聞に供し條。吳公又女を呼上て怒て曰。汝王氏も此事に與らざりしと云へり。然るに今王氏汝を取りしと

いふに何ぞや。女流涙して答て曰。自己不消息して父に慘死を致せり。更に又他人を累さるに忍ざる。願くは相公察し主へ公又王氏に問て曰。既に女に戲れし後此事を何人に語るや。王氏人に語りしに賢て無と供す。吳公怒て。十指を梏せしめ命じて王ひければ。婦王氏已事を得ざ寔を供しき。曾て宿人と云者に告しと云々。吳公立所に鄢生が械を釋き。速に宿人を拘へしむ。宿人至て曾て知らざる由を供しければ。吳公曰。諺に妓に宿する者を良士に非ずと云へり。汝既に王氏に此事を聞く。何ぞ知らずと云る哉。得んと。嚴く械しければ宿人遂に供して云。女の家に至て女を賺せしに真に是有りしとも。履を失ひしを後に敢て復往ず。是故に下翁の殺されし情に寔に知らずと云々。吳

公益怒て嚴く械し給へば。宿外淩籍に堪へざる。據なく遂に自承し
ける。依て吳公招成て鞫上し王に呈す。王公人皆吳公を神と稱せざる
なし。宿外も今の為方なく。唯首を延して秋決を待のみ。時に此頃學
使施公と云人。賢能の聞有て。衆人皆施公を最と稱す。是に因て
宿外便宜を求めて。寃の狀を控て施公に其招供を討めて反覆疑思
して。案を拍て大に歎して曰。宿外寔に寃なり。遂に院司に諸
て。案を移して再鞫し王に。施公先宿外に問て曰。難ハ何の所に遺
しる。宿外供して曰。其處を覺えず。共王氏が門を叩くのみ。袖中
に在し。施公轉王氏に詰て曰。宿外が外に奸夫幾人ある。王氏供して
曰。身宿外と雅齒よりの交合なし。未謝絶せざる。其後も挑る者あ

に非ずと云。寔に從ざると云。施公因て其人の姓名を指言ハしむる
に王氏供して云。同里の毛大屢挑け是共固く拒て從ハず。施公又問て曰。
汝が夫遠く出て久く歸らず。故に挑し來る者無しや。王氏曰。有り。某
甲某乙皆借貸餌贈を以て一二次。妾が家に出入致せりと云。是皆巷中
の游蕩子なり。王氏に公有り。未發言せざる者共。施公惡其者共
の名を藉て拘へしむ。既に皆拘へ集りぬ。施公自引率て城隍廟に赴
き。盡く神前の案の前に平伏せしめ告て曰。曩夜夢に神人來て我
に告て曰。王氏人を殺す者汝等四五人の中に在と。教へ王に汝ら如し
早く自首せば。寛宥しく輕罪に處べし。と言聞せ是共。皆同聲に覺
無しと供す。施公曰。汝等既に自招せざる。神來て必指し王に云て。

下翁の女臙
脂鄂秋隼を
慕ひて大に
禍を起す

吏人の命じて。氈或は褥を用て社殿の牕を悉く障塞ぎて暗黑す。諸囚共を皆両祖せて。背を露はし暗中の驅入て盆の水を入て人どふ。自盟はしめ訖て。是を壁下の繫て立しめ。戒て壁の向て動くる無からしむ。且告て曰。神来て人を殺す者の背の字を書王べしと云。せて戸を閉て少間して喚出し驗視て。毛大を指して曰。真の下翁を殺す賊と云て。毒刑を加べ遂の盡く其寃を吐く。是は施公先人を城隍廟の便はして。壁の灰を塗しめ。又烟煤水の中を濯しめ。人を殺す者を神来て。背中の字を書王の字と云。攸せる故の人を殺す者心中の且を懼て。壁の向て匿れし故の背中の灰色著る。又外へ出る時も。猶恐て深く背を護ひし故の烟色著るる。施公最初て此毛大を疑ひし。是謀て忽見て毛大遂の其罪の代しを。此案已の結了けて。施公判を書して。東昌の邑宰に贈る。其文の曰。

宿人祇縁両小無猜。遂野鶩如家雞之戀。爲因一言有漏。致得隴興望蜀之心。辛而聽病燕之嬌啼。猶爲玉惜。憐弱柳之憔悴。末似鶯狂。而釋公鳳于羅中。尚有文人之意。乃刼香盟于幾底。寧非無賴之尤。蝴蝶過墻。隔牕有耳。蓮花卸瓣。隨地無踪。假中之假。以生寃外之寃。誰信是寃。稍寬笞扑。折其已受之刑。姑降青衣。開彼自新之路。毛大魄奪。自

天魂攝干地浪衆搓木直入廣寒之宮逕泛漁舟
錯認桃源之路遂使情火息焰慾海生波刀横直
前投鼠無他顧之意寇窮安往急兒生返噬之心
風流道乃生惡魔温柔鄉何有此鬼蜮哉即斷首
領以快人心臙脂身雖未字年已及笄爲因一綫
纏縈致使群魔交至爭婦女之顔邑恐失胭脂惹
鷙鳥之紛飛並名秋隼蔵猶自守幸白璧之無瑕
縲紲苦爭喜錦衾之可覆嘉其入門之拒猶潔白
之情人遂其擲果之心亦風流之雅事仰彼邑令
作爾氷人

と書送り給べ邑令氷人とるるまく。鄂生が為め委禽し遂に鼓吹し
て臙脂を鄂家に送り給とぞ。

吉田屋